

ドンラム村の伝統的衣装

Study of Traditional Clothes in Duong Lam

昭和女子大学 下村久美子、谷井淑子、金井千絵

1、研究の背景

本調査研究は、ベトナム ハノイ都市圏において都市下町、近郊新興住宅地、都市郊外農村の3地区の生活実態と変化を比較し、伝統と近代化の調和のとれた都市づくりを目指す研究プロジェクトに位置づけられた「衣生活」に関する分担研究の一部である。衣生活分野のプロジェクトは、ハノイ国家大学 Phan hai Line 先生の協力のもと、本学の猪又、小原、谷井、下村、金井がアンケート調査および現地調査を行っている。本報告は、ドンラム村農村集落保存プロジェクトの生活文化調査によって、伝統的衣装の形態、着装方法、また伝統的な衣装に用いられる布の染色方法について得られた結果の一部である。一般に伝統的な衣装は地域の気候風土に適応し、身近で入手できる衣料資源が活かされ、起居動作を含む生活様式とともに育まれた民族特有の美意識や精神文化、技術水準を反映している。聞き取り調査は以下の8項目を基本として行った。1) 衣服の種類、2) 衣服の使用目的(日常服、際礼服、祭礼・行事服) 3) 着用者(年代・性別・職種・階層) 4) 衣服の調達法 5) 衣服の繊維素材 6) 制作技法 7) 着装の意味・象徴 なお、祭礼服に関しても調査を行なったが、本研究では伝統的な日常着を中心に報告する。

2、調査結果

1) 現在の日常着

現在のドンラム村の人々の日常着は、男性は年齢を問わずシャツとズボンである。また、中、若年層の女性も同様にシャツとブラウスとズボンなどの服装である。中年女性の場合は、上衣は柄物のブラウスに下衣は黒っぽいズボンの組み合わせが多くみられ、ベトナム特有のものとして、上下を共布で作ったズボンの組み合わせもみられた。また、子供たちは世界的に共通とも言えるTシャツに半ズボン姿である。



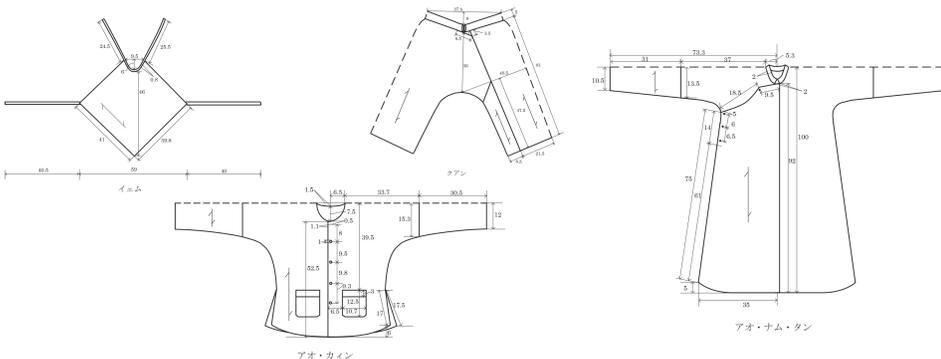
3) クアンの構成

現在では伝統的なクアンの仕立てができる人は少数である。脚部から股下にかけて一枚布で裁ち、股下から裾口にかけて矩形の布を接ぎ、4枚の布で構成されている。布を無駄なく使用し、大変合理的な方法によって製作されている。股下がバイアスとなるため動きやすく、裾口もゆったりと広いため夏の暑いベトナムの湿潤な気候に合った形態と言える。



2) 伝統的な日常着

伝統的な日常着の着装は、イエム(Yem 胸当て)の上に、衿無し前あきの長袖の上衣であるアオ・カイン(Ao 衣 canh 羽根・薄い)を着用し、その上からゆったりと黒のクアン(Quan ズボン)を着用する。家の中ではイエムとアオ・カインにクアンの組み合わせが一般的であるが、外出や作業時にはその上に茶色のアオ・ナム・タン(5枚はぎの長い上衣)またはアオ・トゥー・タン(4枚はぎの長い上衣)を重ね、腰に帯を結ぶ。作業の際など裾が邪魔な場合はアオ・ナム・タンのボタンを留めず、前裾を結んで着用する。また、長い髪は帯状の布で結び上げ、黒のカチーフを被り、外では菅笠のノン(non)を被る。なお、伝統的な日常着を着用しているのは主に70代以降の高齢女性に限られている。



3) アオ・ナム・タン、クアンの染色

ドンラム村の伝統的な衣服には茶色系のものも多く、アオ・ナム・タン、クアン共に、合成染料が使用される以前は、染色材料として山中や林に生息しているCu nau(クーナウ)を使用して染色していたとのことである。この植物は塊根の一種で、その生息域は石垣島が北限とされており、日本でも衣服や漁網の染色に用いられていた。

合成染料が使用されるまではベトナムでは衣服の染色に用いるために、最も入手しやすい植物であり、輸出もされていたが、次第にその採取も行われなくなり、現在では一部の少数民族が染色に使用しているのみとなっている。根が多いものは若く色素分が少ないため、根が少なくなったものを選び、染色材料とする。主成分はタンニン色素である。60年前の染色操作は以下のように行っていたとのことである。



■アオ・ナム・タンの海老茶色の染色の場合

- 市場でCu nau を購入し、a) 水で洗う b) 削って細かくする
- c) Cu nau を煮る d) 煮汁をこしてとり、布を汁につける
- e) これを100回くらい繰り返す。この作業は15日間程度であった。
- f) さらに太陽の光で干す。濃色が良いとされ、日光があたると濃くなるといわれている。

■クアンの黒を染色する場合

前述 a) ~ f) までの作業は海老茶色同様であるが、その後さらに、g) 泥に1回(3時間程度)つけると黒になる。なお、この泥はグアバの葉が落ちた場所の泥を使用した。h) 泥につけた後で、さらにCu nau 液にて2~3回染める。

3、協力活動

1) ワークショップの開催

2006年 調査と同時に、ドンラム村の伝統的な衣装にはどんなものがあるのか、それを後世にいかにつづけていくか、村民同士で考えてもらう機会として、伝統衣装保存再生ワークショップを行なった。ワークショップでは以下の項目を中心に行なった。

①2005年の調査結果報告

調査した結果を写真で紹介し、ドンラム村の衣服の特徴は大変興味深いことを伝え、現在では伝統的な衣装を着用している村民は高齢者のみとなっており、このままでは大切な伝統衣装がなくなってしまう恐れがあること、また、祭礼衣装に施される刺繍は新調に伴い簡略化される傾向にあるなど現状を知らせる。

②染色について

日本の天然染料を紹介し、ドンラム村では染色作業は現存していないようだが、昔は行なわれていたと考えられる事を伝える。

③意見交換

日常着として、現在どこにどれだけ伝統的な衣装が残っているか、祭礼衣装について どの行事でどういう衣装を着用するか、染色材料や方法を知っているかどうかなど、紹介した以外に村民が知っていることを中心に意見交換する。

④ドンラム村の祭礼衣装、日常着の保存と継承

祭礼衣装、伝統的な日常着は文化として保存継承すべき価値あるものである事を確認する。



2) ユネスコ・イコモス視察時のベトナム側による衣服展示

2007年3月には、エンゲルハルト氏を始めとするユネスコ・イコモスの方々へ現地視察いただいた。

そのおり、これまでの調査結果を基にした伝統的なベトナムの衣装を、ハノイ国家大学 Phan hai Line 先生の指導のもとでベトナム側が衣服展示を行なった。



4、まとめ

ベトナムでは、急激な勢いで進む近代化に伴い、生活全般が変化し、伝統文化や風俗が急速に失われつつある。衣生活においてもその傾向は顕著で、気候風土に適した独自の衣服や被り物は、着装法も含めて、次世代には受け継がれておらず、消え去ろうとしている。ドンラム村でも、本調査時点で、伝統的な日常着を着用しているのは主に70代以降の高齢女性に限られており、今後伝統的な衣装が時代の変化と共に失われていく懸念がある。そこで、伝統衣装に関する資料を今うちに保存記録し、文化の継承を行う必要がある。そのためには今後以下の研究活動が考えられる。

- 1) 伝統的祭礼衣装、伝統的な日常着の保存記録のために協力できることを伝え、伝統的な衣装の種類、使用目的(日常着、儀礼用、祭礼、行事)、着用者、繊維素材、制作技法、着装方法などについて写真、図録などで記録保存するために協力する。
- 2) 染色方法を再現して、染色の実際を記録する。
- 3) 伝統的な日常着や祭礼衣装を博物館などに展示し紹介する。
- 4) 現在残っている祭礼衣装は現存の物は、古い伝統的なものよりも刺繍などが簡易化されているため、現存している古い衣装を元に、再現して展示する。